ALBA アルバ
TROSS-VIEW
第2・第4木曜日発売
9月25日号
No.660
特別定価 ¥600

体感! 実感! すぐ実践!!

3か月で20打縮める!
驚異のメソッド

3か月で80を切る

あなたのゴルフ人生を変える
究極の解答集

ホントにいた!
いきなり上手くなった人の共通点

スイングにも断捨離が必要
いらない技術の捨て方

ティショットは
左へいかない1Wとつかまるの2択

トッププロだって悩みは同じ!
振り遅れ防止対策

ロングパットは
「どうせ3パット」と考えて常にオーバーさせるつもり

いつでもどこでもジャストミート!
"当て勘"を養う

有名人・トップアスリートの
ヘッドスピード測りました!

ガンバ大阪・遠藤
49.3m/s

プロレスラー・棚橋
46.7m/s

モデル・押切もえ
33.1m/s

ほか

ただいま世界最強
マキロイのスイング

Rory McIlroy

平成26年9月11日発行・発売(第2・第4木曜日発行・発売)第28巻第26号 通巻第1111号 昭和61年5月18日第三種郵便物許可

Non Fiction
ノンフィクションA
［第29回］

子どもたちが芝生の上で跳ね回る
栃木県鹿沼市の「ごるふぁみふぇすた」

ゴルフ場が"公園"になった日

初めてゴルフ場に足を踏み入れたときのことを覚えているだろうか？ クラブハウスを抜け、目の前に広がる緑のじゅうたんを深い感動をもって眺めた人も多いのではないだろうか。それが感受性の高い子どもならなおさら。しかし、その感動はほとんどゴルファーだけが独占しているのが現状だ。ゴルフをするしないにかかわらず、ゴルフ場というぜいたくな空間をもっと共有できるようにしたい。そんな試みが夏休みのある日おこなわれた。

取材、文・加藤ジャンプ　撮影・有高唯之

「カエル探検隊！」

水着だろうか。はたまた、水遊びが面白過ぎて、シャツを脱ぎ捨てたのか。とにかく、少年たちはパンツ一枚になって、池のなかをざぶざぶと波をたて歩いていた。スチロールの白い皿の上に本物の小さなカエルがのっかっている。そのカエルを隊長に、彼らは水のなかでおおはしゃぎしている。8月18日のことである。場所は栃木県鹿沼市。その日、あたりの体感温度は

「35度近いんじゃないですか」

池の周りを管理する男性が語った。暑い夏の日。照りつける太陽を反射してきらきらと輝く芝生の広がるなかで、子どもたちが思い思いに遊ぶ。

「なんだか外国の公園みたいですね。セントラルパークとか」

訪れたこともないニューヨークの公園の名前が口をついた。そう聞かれた福島範治は、アロハシャツの袖口に汗をたらしながら大笑いした。

「ほんとですよね。これがゴルフ場だなんて、誰も思わないでしょうね」

そう。ここは、栃木県鹿沼市にある鹿沼72カントリークラブなのだ。池は、ボールが落ちたら怨嗟の的にもなる、ゴルフ場のそれなのだ。そこで、子どもたちはパンツ一枚になって水遊びに熱中している。

一体なにごとだ？　ゴルフ場で何がおこっているのだ？

＊

本来、芝を養生するために備え付けられているスプリンクラーも、この日は子どもたちの格好の遊び道具に

スプリンクラーの周りで踊るように水を浴び、大声で笑い合う

ゴルフ場がゴルファーだけのものではなくなる夏休みの一日

Non Fiction A
ノンフィクションA

それは『ごるふぁみふぇすた』と呼ばれる催しであった。鹿沼地域ゴルフ場協議会が主催し、鹿沼市・鹿沼観光物産協会などが後援している。要はゴルフ場を子どもたちはじめ市民に開放する「お祭り」なのである。そうはいっても、普段のゴルフ場を見慣れている者にとっては、やはり不思議な光景であった。

グリーン脇で何度も側転する女の子がいる。スプリンクラーの周りで踊るように水を浴びて喜ぶ子どもたちが大声をあげている。フェアウェイ上にはテントがはられ、『焼きそば』『カレーライス』『かき氷』といった品書きが貼られている。ソースが鉄板の上で焼かれるいいにおいが漂い、そのかたわらを、鹿沼のゆるキャラ『しかごるくん』が手をふりながら闊歩している。

「この暑さでしょ。しかごるくんの活動時間は十数分が限界なんですよ。でもね、去年よりはかなり長くなったんですな。がんばってますよ」

顔色一つ変えずに語ったのは、今年2回目をむかえた『ごるふぁみふぇすた』の会場となった鹿沼72カントリークラブの瀬崎明男支配人だ。

「しかし、元気ですよねえ、子どもって」

瀬崎は遠い目をした。暑いからなのか、催しが成功しつつあることに安堵しているのか……なんともいえない笑みを浮かべた理由はその両方なのだろう。

やおら、フェアウェイに設置された屋外用スピーカーから女性のアナウンスが聞こえてきた。

「すいか割りをはじめます」

もちろんクラブなど使わない。子どもたちは、竹竿などを振り下ろしていた。その光景は、まぎれもない「公園」のそれであった。

*

「そもそもは鹿沼市や観光物産協会などから呼びかけがあり、ゴルフ場で市民となにかできないか話しあったことがきっかけなんです」

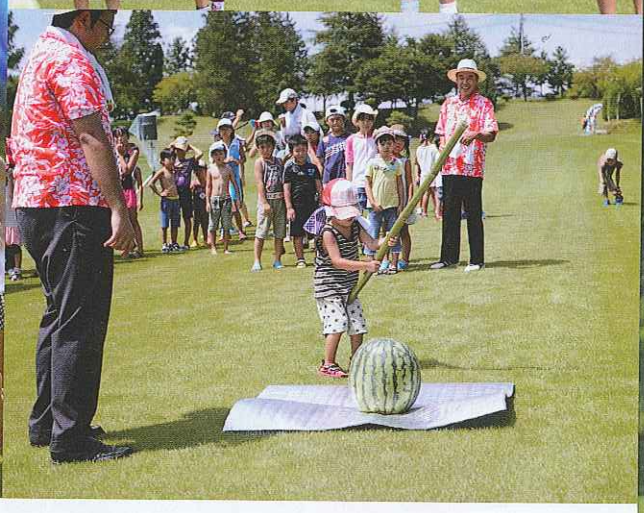
子どもたちは一時もじっとしていることがない。スナッグゴルフで次打を打ちにいくにも常にダッシュ。指導するスタッフもついていくのがやっとの様子だった

上／その手腕で経営危機に陥った鹿沼グループを立て直した福島範治。アイデアの豊富さと実行力もさることながら、地元・鹿沼を元気にしたいという思いが強く感じられる　下／市役所、観光物産協会の各担当者、このイベントの趣旨に賛同する南栃木ゴルフ倶楽部の支配人も応援に駆けつけた

述懐するのは池のほとりからテントにやって来た福島範治だった。福島は『ごるふぁみふぇすた』会場となった鹿沼72カントリーをふくむ鹿沼グループ社長である。鹿沼市には現在13のゴルフ場がある。市の目玉のひとつであり、県外からの来訪者からの大切な収入源でもある。しかし、果たしてこれが鹿沼市民にとって近い存在かといえば、「入っちゃいけないところだと思っていた、と来場しているお母さんにいわれてしまいました」と福島が苦笑するように、敷居の高い場所となっていたのも事実だった。

「ゴルフ場自体も広く可能性を模索していかないとダメなんですよ。それが、ゴルフ人口の増加にもつながる気がしますしね」

福島が憂うのは日本のゴルフ場が置かれた現状である。ゴルフ人口、クラブの売り上げは基本的に毎年減少しているし、閉鎖されるゴルフ場はあとをたたない。定年後の団塊世代がゴルフに使う時間が増えたことで、調査によってはゴルフ人口が増加したようにもみえるが、そうした効果も来年以降は漸減していくといわれている。日本でゴルフにかかわる数字がいずれも右肩下がりなのだ。そうしたなか、鹿沼市では行政とゴルフ場が危機感を共有した。そして、今では珍しい地元資本であり、民事再生を通じて自力で復活した鹿沼グループが、それを引っ張っている。



まずはゴルフではなくゴルフ場に親しみをもってもらうこと

「世界的プレーヤーを目指すジュニアもいていい。でも、日本のゴルフ全体をささえるのは、ふつうのゴルファーの方々なんです。だから、小さいお子さんにこうやってゴルフ場で遊んでもらって、いつか『ゴルフでもやろうっと』て感じで気楽に始めてくれたら、と思うんですよ。気の長い話ではあるんですけどね」

福島が汗をふきながら笑った。まずは市民にゴルフ場に親しみをもってもらう。そしてゴルフ人口の維持。『ごるふぁみふぇすた』もそうした目的をもった活動の一つなのである。地域の行政とゴルフ場が、ゴルフを少しだけ身近にできるよう一緒に汗を流してがんばっている。

＊

「交代、交代。もう、ホント暑いんだから」

若い男性スタッフが、こちらも若い女性スタッフに呼ばれていた。髪を束ねた女性スタッフは滝のように汗をかいていた。呼ばれた男性はテントの下、日陰にいた。

女性スタッフが担当していたのは、ソリ滑りだった。芝生のスロープの上を子どもたちが赤いソリにのって滑走する。ソリにはロープがつけられていて、スタッフが全力で引っ張る。子どもたちはおおはしゃぎだが、炎天下、ロープを引っ張るスタッフはもうヘトヘトだろう。

かといって男性スタッフのほうも決して遊んでいたわけではない。テントの下では、松ぼっくりにペイントをする『わくわく工作ランド』なる催しがおこなわれていたのである。こちらも、子どもたちは夢中だ。背中を丸めて視線を一点に集中して手を動かしている。雲一つない真夏の空の下、独創的な松ぼっくりが次々にしあがっていき、親も目を細める。スタッフは皆むだなく動くし、笑顔をたやさない。若くてきらきらしていて、ゴルフ場というより、どこかのテーマパークのようだ。

伝統を守ることは新しいことを拒否するのとは違う

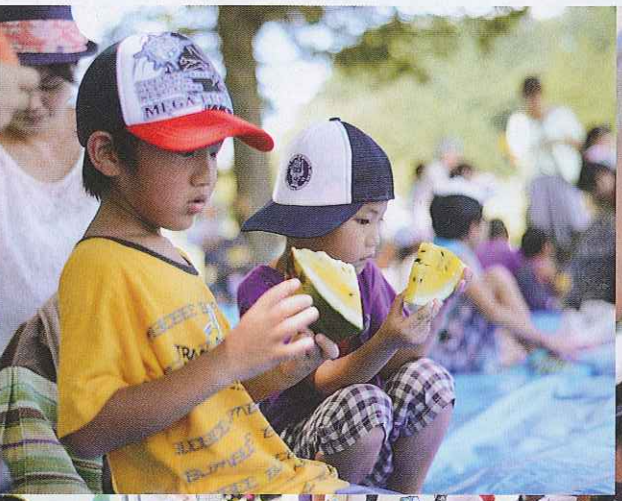
「この出し物は、鹿沼グループの2年目のスタッフに企画からまかせてやってもらったものなんですよ。ゴルフは伝統が大事ですけれど、それは新しいことを拒否するのとは違うと思うんですよ。守るべきことは守りつつ新しいこともやる。守るのはほうっておいても、古いぼくらがやっているから、新しいことを若い人たちに考えてもらう」

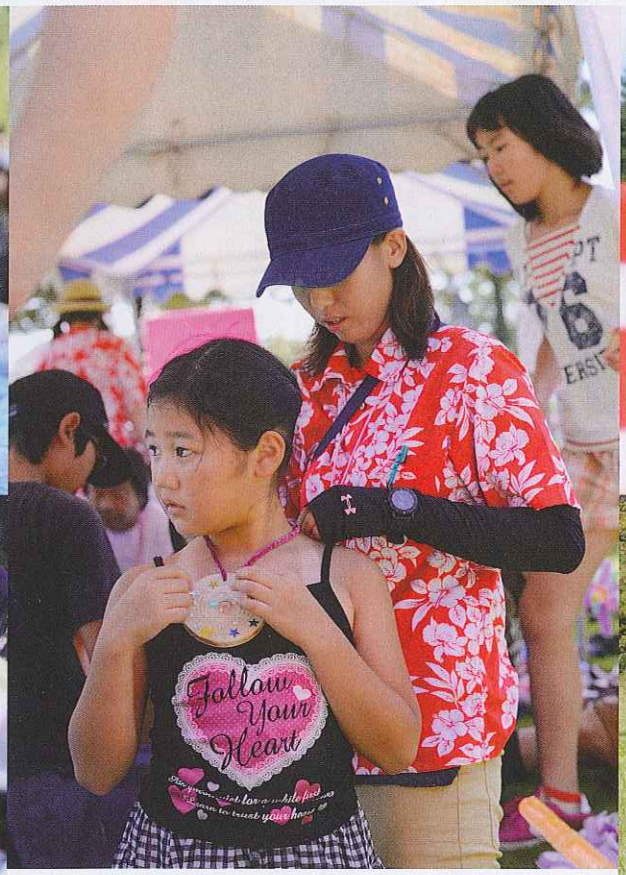
なるほど、である。うなずくこちらを見て福島が笑った。

「でも、テントで松ぼっくりペイントのイベントをやるなんて、俺は一体どこに就職したのかな？ なんて思ってるかもしれませんね」

だが、スタッフの顔は少なくとも現場では充実しているように見えた。そして必死になって松ぼっくりにペイントをしている真横にあったシャボン玉ブースでは、ゴルフスイングの要領でシャボン玉を作る5歳くらいの男の子がいたのである……将来有望ではないか！

鹿沼市のゴルフ場が集ってすすめる動き。その実りは、ちょっとずつではある。だが確実に将来につづく種まきをしているようにもみえる。事実、来場者も2回目の今年は約300名から350名に増加した。もちろん炎天下でもへっちゃらの子どもに付き合う大人はしんどい。しかし、こんな取り組みが各地で増えたら、ちょっとおもしろくなりそうではないか。ここは汗をふきふき大人も一緒に遊んでしまえばいい。帰る頃には、きっともっとゴルフが好きになっている。（文中敬称略）





すべてがスタッフの手づくりで行われた『ごるふぁみふぇすた』。スナッグゴルフ体験も当然用意されていたが、すいか割りやシャボン玉、ソリ滑りに工作と、まったくゴルフに興味のない子どもでも楽しめる。ふだん入れない芝生の上で思う存分遊ぶことで、まずは「ゴルフ場」に親しんでもらうことがテーマなのだ